

半七捕物帳

弁天娘

岡本綺堂

青空文庫

一

安政と年号のあらたまった年の三月十八日であつた。半七はこれから午飯ひるめしを食つて、浅草の三社さんじゃ祭りを見物に出かけようかと思つているところへ、三十五六の男がたずねて来た。かれは神田の明神下の山城屋という質屋の番頭で、利兵衛という白鼠しろねずみであることを半七はかねて知つていた。

「なんだかお天氣がはつきりしないので困ります。折角の三社様もきのうの宵宮よみやはどうとう降られてしまいました。きょうもどうでございましょうか」と、利兵衛は云つた。

「全くいけませんでしたね。降つても構わずにやるというから、わたしもこれからちよいと行つて見ようかと思つているんですがね。少し雲切れがしているから、午過ぎひるすからは明るくなるかと思いますが、なにしろ花時ですから不安心ですよ」

半分あけてある窓の間から、半七はうす明るくなつた空をながめると、利兵衛は少しもじもじしていた。

「では、これから浅草へお出かけになるのでございますか」

「お祭りがごとしはなかなか賑やかに出来たそうですね。それに一軒呼ばれている家うちがありますから、まあちよいと顔出しをしなくつても悪かろうと思つて……」と、半七は笑つていた。

「はあ、左様でございますか」

利兵衛はやはりもじもじしながら煙草をのんでいた。それがなにやら仔細ありそうにも見えたので、半七の方から切り出した。

「番頭さん。なにか御用ですかえ」

「はい」と、利兵衛はやはり躊躇していた。「実は少々おねがい申したいことがあつて出ましたのでございますが、お出さきのお邪魔をいたしては悪うございますから、夜分みか明ようあき朝あさ また出直して伺うことに致しましょうかと存じます」

「なに、構いませんよ。もともとお祭り見物で、一刻いつとき半刻をあらそう用じやあないんですから、なんだか知らないが伺おうじやありませんか。おまえさんも忙がしいからだで幾たびも出て来るのは迷惑でしょうから、遠慮なく話してください」

「お差し支えございますまいか」

「ちつとも構いません。いったいどんな御用です。なにか御商売上のことですか」と、半

七は催促するように訊いた。

いつの時代でも、質物渡世しちもつとせは種々の犯罪事件とのがれぬ関係をもっている。半七は今この番頭の仔細ありげな顔色を見て、それが何かの事件に絡からんでいるのではないかと直覚した。しかし利兵衛はまだ躊躇しているようで、すぐには口を切らなかった。

「番頭さん。ひどくむずかしいお話しゆうござんすね」と、半七は冗談らしく笑った。

「おまえさん、なにか粋事いきごとですかえ。それだと少し辻番が違うが、まあお話しなさい。なんでも聴きますから」

「どういたしまして、御冗談を……」と、利兵衛は頭をおさえながら苦笑にがいをした。「そういう派手なお話だと宜しいのですが、御承知のとおり野暮な人間でございました……。いえ、実は親分さん。ほかのことではございませんが、少々お知恵を拝借したいと存じまして……。お忙がしいところを甚だ御迷惑とも存じますので、手前もいろいろ考えたのですが……」

前置きばかりがとかく長いので、半七もすこし焦しれて来た。かれは再び窓の方を見かえつて、わざとらしく吸いさしの煙管きせるをぼんぼんと強く叩くと、その音におびやかされたように、利兵衛は容かたちをあらためた。

「親分さん。手前はとかく口下手くちべたで困りますので……。まあ、お聴きください。手前自身のことではございませんので、実は主人の店に少々面倒なことが起りまして……」

「ふむ。お店でどうしました」

「御存じかどうか知りませんが、主人の店に徳次郎という小僧がございます。ことし十六で、近いうちに前髪を取るようになって居ります。それが何だか判らないような病気で、きのう亡くなりましたのでございます」

「やれ、やれ、可哀そうに……。どんな小僧さんだかよく覚えていないが、なにしろ十五や十六で死んじや気の毒だ。ところで、それがどうかしたんですかえ」

「徳次郎は半月ほど前から、急に口中が腫れふさがりまして口をき利くことが出来なくなりました。出入りの医者到手当てをして貰いましたが、だんだん悪くなりますばかりで、よんどころなく駕籠に乗せまして、ひとまず宿やどへ下げましたのでございます。宿は本所相あいお生い町ちようの徳蔵という魚屋さかなやで、ふだんから至極実体じつていな人間でございます。ところが、

宿へ帰りましてから徳次郎の模様がよいよ悪くなりまして、とうとうきのうの八ツ頃（午後二時）に息を引き取ったそうで、まことに可哀そうなことを致しました。それもまあ寿じゆみよう命めいなら致し方ないのでございますが、当人がいよいよ息を引き取ります時、廻ら

ない舌で何か申しましたそうで……」云いかけて、利兵衛はまた躊躇した。

「どんなことを云ったんです」と、半七は追いかけて訊いた。

「それがお前さん。徳次郎が死にぎわに、わたしは店のお此このさんに殺されたのだと申した
そうで……」と、利兵衛は小声で答えた。

お此というのは、山城屋のひとり娘で、町内でも評判の容貌きりよう好しであるが、どういうわけか縁遠くて、二十六七になるまで白齒しらはの生娘きむすめであつた。それがために兎角よくない噂が生み出されて、お此は弁天娘というあだ名で呼ばれていた。しかもそれが普通に用いられる善い意味ではないので、山城屋の親たちもよほどそれを苦に病んでいるらしかった。それらの事情は半七もかねて知っていたが、そのお此がどうして小僧を殺したか、彼もさすがに早速の判断を下すことが出来なかつた。その思案の眼色をうかがいながら、利兵衛はつづけて語り出した。

「徳次郎が病氣になりましたのは、ちようどお雛様の宵節句の晩からでございまして、ほかの奉公人の話によりますと、夕方から何だか口中が痛むとか申して、夜食も碌々にたべなかつたそうでございます。それが夜あけ頃からいよいよ激しく痛み出して、あしたの朝には口中が腫れふさがつてしまいました。口をきくことは勿論、湯も粥かゆも薬もなんにも通

らなくなりまして、しまいには顔一面が化け物のように赤く腫れあがってしまいました。したがって、熱が出る、唸る、苦しむというわけで、医者も手の着けようがないような始末になりましたので、主人は勿論、手前共もいろいろと心配いたしましたして、とうとう宿の方へ下げることになりましたのでございます。こんな病気になるについては、なにか自分で心あたりがないかと、病中にもたびたび聞きましたが、ただ唸っているばかりで、なんにも申しませんでした。それが宿へ帰ってから、どうしてそんなことを申したのか、少し不思議にも思われますが、なにしろお此さんが殺したなぞとは実に飛んでもないことで……。けさほど宿やど許もとから徳蔵がまいりまして、仏の遺言というのをたて楯に取って、どうも面倒なことを申します」

「その徳蔵というのは親父ですかえ」

「いえ、徳次郎の兄でございます。親父もおふくろもとうに歿しまして、只今では兄の徳蔵……たしか二十五だと聞いております。それが家の方をやっているのでございます。ふだんは正直でおとなしい男ですが、きようは人間がまるで変ったようでございます。いくら主人の娘でも無暗むやみに奉公人を殺して済むかというような、ひどいけんまく権幕の掛け合いに、主人方でも持て余して居ります。唯今も申し上げる通り、手前の方に居ります時には、ち

つとも口の利けなかつた病人が、家へ歸つてからどうしてそんなことを云いましたか、どうもそこが胡乱うろんなのでございますが、徳藏は確かにそう云つたと申します。いわば水かけ論で、こちらではあくまでも知らないと突き放してしまえば、まあそれまでのようなものでございますが、なにぶんにも世間の外聞もございますので、手前共が氣を痛めて居ります」

「お察し申します」と、半七はうなずいた。「そりやあお困りでしょう」

「勿論、手前方でも相当のとむらい料を遣つかわすつもりで居りますが、どうもその、相手方の申し条が法外でございまして、どうしても三百兩よこせ、さもなければ、お此しさんを下げ手人に訴えると申すのでございます。それもお此さんが確かに殺したのならば、百兩が千兩でも素直に出しますが、今申す通りの水かけ論で、こちらから疑えば……まあ強請ゆすりとも、云いがかりとも、思われないこともございけません。主人に代つて、手前が対談いたしまして、まず十五兩か二十兩で句切ろうと存じたのでございますが、相手がどうしても承知いたしません。とどの詰りが当座のとむらい料と申し、三兩だけ受け取りまして、いずれ葬式とむらいのすみ次第あらためて掛け合いにくると云つて歸りましたが、親分さん、これはどうしたものでございましょう」

山城屋も相当の身代^{しんだい}ではあるが、三百兩といえど大金である。まして因縁をつけられて、なんの仔細もなしに其の大金を絞り取られるのは迷惑であろう。利兵衛がどうしたものであろうと相談をかけるのも、所詮は半七の力をかりて、なんとか相手をおさえ付けて貰^{もら}いたい下^{したところ}心であることはよく判っていた。役目の威光^{かき}を嵩^{かさ}にきて、金銭上の問題にかかり合うのは、自分の最も嫌うところであるので、唯それだけの相談ならば、半七はなんとか云つて断わつてしまいたいと思つたが、悲惨の死を遂げた徳次郎という小僧の遺言が嘘かほんとか、又その兄の徳蔵のうしろには誰か糸をあやつっている者があるかないか、それらの秘密を探り出してみたいという念もあつたので、彼はしばらく考えた後に利兵衛に訊^きいた。

「番頭さん。一体あのお此さんという子は、なぜいつまでも独りでいるんですね。いい子だけれども、惜しいことにちつと臺^{とう}が立つてしまいましたね」

「そうでございますよ」

利兵衛も顔をしかめていた。

番頭の説明によると、世間の噂はみな根も葉もないことで、山城屋の娘は単に不運というに過ぎないのであった。

お此はひとり娘であるので、幼い時から親類の男の児を貰って、ゆくゆくは二人を一緒にする心組みであつた。ところが、その男の児はある年の夏、大川へ泳ぎに行つて溺死した。それはその児が十四で、お此が十一の年の出来事であつたが、それが不運のはじまりで、その後お此と婚礼の約束をしたものは、まだ結納ゆいのうの取りかわせも済まないうちに、どれもみな変死を遂げたのである。それが最初から数えると四人で、しかも最後の男は十九の年に乱心して、自分の家の物置で首をくくつて死んだ。こういう不思議な廻りあわせがお此を縁遠くしてしまつたので、ほかには何の仔細もない。しかし世間の口はうるさいもので、それらの事情を知っているものはお此には一種の祟りたたがあると云い、事情を知らないものはお此が轆轤ろくろくび首であるとか、行燈あんどんの油をなめるとか云い触らすので、さなきだに縁遠い彼女をいよいよ廢りすたものにしてしまつたのである。

そのなかでも最も多数の人に信じられているのは、彼女が弁天様の申し子であるという説で、弁天娘のあだ名はそれから作られたのであつた。山城屋の夫婦はいつまでも子のな

いのを悲しんで、近所の不^{しの}忍^{ばず}の弁天堂に三七日^{さんしちにち}のあいだ日参^{にっさん}して、初めて儲けたのがお此であつた。弁天様から授けられた子であるから、やはり弁天様と同じようにいつまでも独り身でいなければならぬ。それが男を求めようとするために、弁天様の嫉妬の怒りに触れて、相手の男はことごとく亡ぼされてしまうのであるといふので、弁天娘の美しそうな異^い名^{みょう}も彼女に取つては恐ろしい呪^{のろ}いの名であつた。

よもやとそれを打ち消す人たちも、お此が弁天様の申し子であるといふ事実を否認するわけには行かなかつた。で、弁天堂へ日参をはじめてから、山城屋の女房が懐胎してお此をうみ落したのは事実であると、利兵衛は云つた。

「なにしろ困つたものでございます」と、彼は語り終つて溜息をついた。「香^{こう}花^{はな}茶の湯から琴三味線の遊芸まで、みな一と通りは心得ていますし、容^{きり}貌^{よう}はよし、生まれ付きおとなしく、まず申し分はないのでございますが、右の一件でどうにもなりません。明けてもう二十七になります。ひとり娘ではあり、そういう訳でございますから、親たちもひとしお不^ふ憫^{びん}が加わりまして、それはそれは大切に可愛がつているのでございます。それでも当人は人出入りの多い店の方にいるのを忌^{いや}がりまして、この頃では裏の隠居所の方に引込んで、今年八十一になります女隠居と二人で暮らしております」

「その隠居所には、隠居さんと娘のほかに誰もいないんですか」と、半七は訊いた。

「三度のたべものは店の方から運ばせますが、ほかに小女こおんなを一人やってございます。それはお熊と申しまして、まだ十五の山出しで、いつこうに役にも立ちません」

「隠居さんも、八十一とは随分長命ですね」

「はい。めでたい方でございます。しかし何分にも年でございますから、この頃は耳も眼もうとくなりまして、耳の方はつんぼう同様でございます」

「そうでしょうね」

役に立たない小女と、眼も耳もうとい隠居婆さんと、縁遠い容貌よしの娘と、この三人を組みあわせて、半七はなにか考えていたが、やがてしずかに云い出した。

「なにしろ困ったことだ。そのままにしても置かれますまいから、まあ何とかしてみしよう。そこで、娘は無論そのことを知っているんでしょうね」

「徳次郎の死んだことは知って居りますが、それについて兄が掛け合いにまいましたことは、まだ当人の耳へは入れてございません。たとい嘘にしろ、自分が殺したなどと云われたことが当人に聞えましては、どうもよくあるまいと存じまして、まだ何も聞かさないように致して居ります」

「判りました。じゃあ、まあその積りでやってみましょう。だが、番頭さん。隠居所の方へは誰か気の利いた者きをもう一人やつておく方がようござんすね」

「そうでございましょうか」

「その方が無事でしようよ」

「はい」と、利兵衛はなんだか呑み込めないような顔をしてうなずいた。「では、なにぶん宜しくねがいます」

「つまりお此さんが確かに小僧を殺したか殺さないかが判ればいいんでしょう。それさえ判れば水かけ論じゃあねえ、こっちが立派に云い開きが出来るんですから、金のことなぞはどうとも話が付くでしょう」

「さようでございます。やっぱり御相談をねがいに出てよろしゅうございました。では、くれぐれもお願ひ申します」

律儀りちぎ一方の利兵衛はくり返して頼んで帰った。こうなると、三社祭りなどは二の次にして、半七はまず山城屋の問題を研究しなければならなかった。徳次郎という小僧は果たして山城屋の娘に殺されたのか。あるいは誰かその兄貴の尻押しをして、山城屋に対して根もない云いがかりをしたのか。半七は午飯を食いながらいろいろに考えた。

「山城屋さんに面倒なことでも出来たんですか」と、女房のお仙は膳を引きながら訊いた。「むむ。だが、大してむずかしいこともあるめえ。おれはこれから玄庵さんのところへ行ってくるから、着物を出してくれ」

箸をおくと、すぐに着物を着かえて、半七は傘を持って表へ出ると、雨はまだ未練らしく涙を降らしていたが、だんだん剥^はげてくる雲のあいだからは薄い日のひかりが柔^{やわら}かに流れ出して来た。近所の屋根では雀の鳴く声もきこえた。玄庵は町内に住んでいる町医者で、半七はかねて心安くしているので、参考のためにまずそれをたずねて、口中の病^{うち}気についていろいろの容態や療治法などを聞きただした上で、さらに相生町の徳蔵の家をたずねてゆくと、柳原堤^{どて}へ差しかかる頃に空はまったく明るくなって、ぬれた柳のしずくが光りながらこぼれているのも春らしかった。

両国橋を渡って本所へはいると、徳蔵の家は相生町二丁目にあった。間口は狭いが、ともかくも表店で、きようは勿論商売を休んでいるらしかった。近所の荒物屋できくと、徳蔵はお留という女房と二人ぐらして、徳蔵が盤台をかついで商売に出た留守は、お留が店の商いをしているのであった。亭主もよく稼^{しんしょう}ぎ、女房もかいがいしく働くので、小金は溜^{しうだ}めているらしい。あの人達は今に身^{しんしょう}上を仕出^{しうだ}すであろうと、荒物屋のおかみさんは羨

ましそうに話した。

徳蔵の女房は吉原の河岸店かしみせの勤めあがりで、年ねんあきの後に、徳蔵のところへ転ころげ込んで来たのである。亭主よりも四つ年上で、今年二十九になるが、商売あがりには珍らしい位にかいがいい女で、服装なりにも振りに構わずに朝から晩までよく働く。徳さんは良いおかみさんを持って仕合わせだと、これも近所に羨まれているとのことであつた。

半七は荒物屋を出て、更にほかの家で訊きいてみたが、近所の噂はみな一致していて、誰も魚屋の夫婦を悪くいう者はなかつた。それほど評判のいい徳蔵が根もないことを云いがかりにして、弟の主人の店へねじ込んで行こうとは思われなかつたが、それにしても三百両という大金をねだるのは少し法外であると思つた。勿論、人の命に相場はない、千両万両といわれても仕方がないのであるが、それほど正直者の徳蔵が自分の方から金高を切り出して、強請ゆすりがましいことを云いかけるのがどうも呑み込めないように思われてならなかつた。

この上は正面から魚屋へ押し掛けて、徳蔵夫婦の様子を探るよりほかは無いと思つたので、半七はそこらの紙屋へ寄つて、黒い水引みずひきと紙とを買つて香かう奠でんの包みをこしらえた。それをふところにして徳蔵の店へゆくと、狭い家のなかには近所の人らしいのが五、六人

つめ掛けていて、線香の匂いが家じゅうにただよっていた。

「ごめんなさい」

声をかけると、一人の女が起つて来た。三十に近い、色の蒼白^{あおしろ}い、痩せぎすの女房で、それがお留であるらしいことを半七はすぐに看^みて取った。

「こちらは魚屋の徳藏さんでございますか」

「はい」と、女は丁寧^{ていねい}に答えた。

「御亭主はお内ですか」

「やどは唯今出ましてございます」

「左様でございますか」と、半七は躊躇しながら云い出した。「実はわたくしは外神田の山城屋さんの町内にいるものでございますが、うけたまわればこちらの徳次郎さんはどうも飛んだことで……。わたくしも御近所で、徳次郎さんとはふだんから御懇意にいたして居りましたので、ちよつとお線香をあげに出しました」

「それは、それは、ありがとうございます。穢^{きたな}いところでございますが、どうぞこちらへ……」

女はちよつと眼をふきながら、半七を内へ招じ入れた。どこで借りて来たのか、小綺麗

な枕屏風まくらびょうぶが北に立てまわされて、そこには徳次郎の死骸が横たえてあつた。半七は式の通りに線香をささげ、香奠を供えて、それから死骸の枕もとへ這いよつた。顔にかけてある手拭を少しまくつて、かれはその死に顔をちよつと覗いて、隅の方へ引きさがると、お留は茶を持つて来て、ふたたび丁寧えいやくに会釈した。

「おなじみ甲斐にどうもありがとうございます。仏もさぞ喜ぶでございましょう」

「失礼ですが、おまえさんはこちらのおかみさんですかえ」

「はい。徳次郎の嫂あねでございます」と、彼女は眼をしばたいた。「徳蔵もほかにこれという身寄りも無し、あれ一人をたよりにしていたのでございます」

「かえすがえすも飛んだことで、実にお察し申します」

半七は繰り返して悔みを述べて、それからだんだん訊き出すと、徳次郎は九つの春から山城屋へ奉公に出て、今年で足かけ八年になる。年の割には利巧で、児柄こがらもいい。ことしの正月の敷入りに出て来た時に、となりの足袋屋のおかみさんが彼を見て、徳ちゃんは芝居ひさまつに出る久松ひさまつのようだと云つたら、かれは黙つて真つ紅な顔をしていた。そんなことも今では悲しい思い出の一つであるとお留はしみじみ云つた。

何分にもほかに幾人も坐っているの、半七はその以上に斬り込んで訊くことも出来な

かった。おとむらいはと訊くと、きょうの七ツ（午後四時）に深川の寺へ送るのだとお留は答えた。七ツといえbaum間もないのであるから、いつそこに居坐っていたら、そのうちに徳蔵も帰るであろうし、寺まで付いて行ったら又なにかの手がかりを見つけ出さなとも限らないと思つたので、半七は自分も見送りをすると云つて、そのままそこに控えていると、やがて一人の若い男が帰つて来た。小ぶとりに肥つた実体じつていそうな男で、お留やほかの人達の挨拶ぶりを見ても、それが徳蔵であることはすぐに判つた。そのあとから山城屋の番頭の利兵衛と一人の小僧が付いて来た。

利兵衛は主人の名代みようだいに見送りに来たと云つた。小僧の音吉は奉公人一同の名代であると云つた。お留に引きあわされて、半七は徳蔵に挨拶したが、利兵衛は半七に挨拶していいか悪いか迷っているらしいので、半七の方から声をかけて、単に近所の知り合いのよばつうに跋ばつをあわせてしまった。そのうちに葬式とむらいの時刻もだんだん近づいて、町内の人らしいのが更に七、八人も詰めかけて来たので、せまい家のなかはいよいよ押し合うように混雑して来た。

その混雑にまぎれて、徳蔵夫婦の姿がどこへか見えなくなつた。

三

半七はそつと起つて台所の口から覗くと、夫婦は裏の井戸端に立っていた。裏は案外ひろい空地になつていて、井戸のそばには夏の日よけに植えたらしく、葉のない一本の碧梧あわぎが大きい枝をひろげていた。その梧の木を背中にして、お留がなにか小声で亭主と話していたが、その様子がどうも穏やかでないらしく、普通の相談事でないように見えたので、半七は半分しめ切つてある腰高の障子に身をかくして、二人の様子をしばらく窺っていると、夫婦の声は少し高くなつた。

「だからおまえさんは意気地がないよ。一生に一度あることじゃないじゃないか」と、お留は罵るように云つた。

「まあ、静かにしろよ」

「だつてさ。あんまり口惜くやしいじゃあないか。こうと知つたら、わたしが行けばよかった」

「まあいいよ。人にきこえる」

徳蔵は女房をなだめながら、思わずうしろを見ると、その眼があたかも半七と出合つた。そんなことに馴れている半七は、そこにある手桶の水を柄杓ひしゃくに汲んで飲むような振りを

して、早々に元のところへ帰つて来た。夫婦もやがて帰つて来たが、お留の顔色は前より悪かった。ときどき^{けわ}嶮しい目をして忌々^{いまいま}しそうに利兵衛を睨んでいるのが半七の注意をひいた。

やがて葬式が出る時刻になつて、三十人ほどの見送り人が早桶について行つた。それでも天気になつて徳ちゃん^{ごしょう}は後生がいいなどと云うものもあつた。弟の葬式ではあるが、なにかの世話を焼くために徳蔵も一緒に出て行つた。お留は門^{かど}送りだけで家に残つていた。

雨は晴れたが、本所あたりの路は悪かつた。そのぬかるみを渡りながら、半七はわざと後^{あと}の方に引き下がつて利兵衛と並んで歩いた。

「徳蔵は又お店へ行つたんですかえ」と、半七は歩きながらそつと訊いた。

「また押し掛けて来て困りました」

徳蔵は三両のとむらい金を貰つて一旦帰つたのであるが、午^{ひる}すぎになつて又出直して来て、どうしても葬式を出すまゝにこの一件の埒^{らち}をあけてくれと迫つた。自分の家の宗旨^{しゅうし}は火葬であるから、死骸を焼いてしまえば何も証拠が残らないことになる。どうしても死骸を寝かしている間になんとか決めてくれないでは困るというのであつた。山城屋でも持て

余して、半七の家へ使をやると、彼はもう出てしまったあとなので、どうすることも出来なかった。何やかやともんちやく 押し着きしているうちに、徳蔵の声はだんだん大きくなるので、山城屋の主人も我がを折がつて、かれの要求する三百両に対して百両を提供して、この以上はどうしても肯きくことはならない、これで不承知ならどうともしろと云い渡すと、徳蔵の方でも我がを折がつて、とうとうそれで納得することになった。かれは百両の金と引き換えに弟の死骸をひき取ることに付いて何の苦情はないという、後日べつにちのために一札を書かされた。

その話を聴いて、半七はうなずいた。

「ああ、そうでしたか。だが、まあ、それで無事に納まれば結構でしょう。なにしろ、こんなことの出しゅつ来たいしたのがお互いの災難ですからね」

「どうも仕方がございますまい」と、利兵衛はまだあきらめ切れないように云った。

「そこで、つかんことを訊くようですが、お此さんは針仕事をしますかえ」

「はい。針仕事は上じょうず手ずでございまして、それになんにも用がないもんですから、隠居所の方で毎日なにか仕事をして居ります」

半七はかながえながら又訊いた。

「わたしは知りませんが、裏の隠居所というのは広いんですかえ」

「いえ、それほど広くもございません。女中部屋ともで六間^{むま}ばかりで、隠居はたいてい奥の四疊半の部屋に閉じ籠^{こも}っております」

「娘は……針仕事をするんじやあ明るいところにいるんでしょね」

「南向きの横六疊で、まえが庭になっております。そこが日あたりがいいもんですから、いつもそこで仕事をしているようでございます」

「店の方から庭づたいに行けますか」

「木戸がありまして、そこから隠居所の庭へはいれるようになって居ります」

「なるほど」と、半七は思わずほほえんだ「それから其の隠居所の、お此さんのいる六疊の部屋で、近い頃に障子の切り貼^はりでもしたことはありませんかえ」

「さあ」と、利兵衛はすこし考えていた。「隠居所の方のことはくわしく存じませんが、そう云えば何でもこの月はじめに、隠居所の障子を猫が破いたとか云って、小僧が切り貼りに行ったことがあったようでした。併しそれはお此さんの部屋でしたか、どうでしたか。おい、おい、音吉」

二、三間も先に立ってゆく小僧を呼び戻して、利兵衛は訊いた。

「このあいだ隠居所の障子を切り貼りに行ったのは、お前じゃなかったか」

「わたくしです」と、小僧は答えた。「お此さんがいつも仕事をしている六畳の障子です。なんでも猫がいたずらをしたとかいうことで、下から三、四段目の小間こまが一枚やぶけていました」

「いつ頃だか、その日をたしかに覚えていないかえ」と、半七は訊いた。

「おぼえています。お節句の日でした」

半七はまたほほえんだ。それぎりで三人は黙つてあるいた。

そのうちに深川の寺へゆき着いたが、葬式は極めて簡単なものであつた。山城屋から三両という送葬料とむらいを取つて置きながら、こんな投げ込み同様のことをするとは随分ひどいやつだと半七は思った。葬列の着くまえに近所の者が二、三人先廻りをしていて、徳蔵に手伝つて何かの世話をやいていたが、そのなかの一人が半七を見て丁寧ていねいに挨拶した。

「やあ、神田の親分。おまえさんも見送りに来て下すつたのですかえ。路の悪いのにどうも恐れ入りました」

それは浅草に住んでいる伝介という男であつた。三十二三の小作りの男で、表向きの商売は刻み煙草の荷をかついで、諸屋敷の勤番部屋や諸方の寺々などへ売りあるいているのであるが、それはほんの世間の手前で、実は小博奕こばくちなどを打っている無頼漢ならずものであること

を半七は知っていた。堅氣^{かたぎ}に見せかけても何となくしろ暗いところがあるので、彼は半七にむかつては特別に腰を低くして、しきりに如才なく挨拶していた。飛んだところで忌^{いや}な奴に逢ったとは思いながら、半七はまずいい加減にあしらっていると、伝介は茶を汲んで来て小声で訊いた。

「親分も徳蔵^{うち}の家を御存じなんですかえ」

「いや、兄貴は知らねえが、弟の方は山城屋さんにいる時から知っているので、きょうは見送りに来たのさ。なにしろ若けえのに可哀そうなことをしたよ」

「そうでございますよ」と、伝介はなんだか腑^ふに落ちないような顔をしていた。

「おまえもこうして働いているようじゃあ、徳蔵とよっぽど心安くしていると見えるな」

「ええ。ときどき遊びに行くもんですから」と、伝介はあいまいな返事をしていた。

葬式が済んで寺の門を出ると、この頃の春の日はもう暮れかかっていた。帰るときに会葬者は式の通り^{かた}の塩釜をめいめいに貰ったが、持って帰るのも邪魔になるので、半七はその菓子^{かし}を山城屋の小僧にやった。そうして、そばにいた利兵衛にささやいた。

「番頭さん。済みませんが、少しお話し申したいことがありますから、小僧さんだけを先に帰して、おまえさんはちよいと其処らまで一緒に来て下さいませんか」

「はい、はい」

云われた通りに小僧を帰して、利兵衛は素直に半七のあとに付いてくると、半七はかれを富岡門前の或る鰻屋へ連れ込んだ。ここでは半七の顔を識っているので、丁寧に案内して奥の静かな座敷へ通した。半七も利兵衛も下戸げこであつたが、それでもまず一口飲むことにして、猪口ちよこを二、三度やり取りした後に、酌の女中を遠ざけて、半七は小声で云い出した。

「さつきも云う通り、徳次郎の一件はまあ百両で内済になつて結構でしたよ」

「そうでございましょうか」

「後日に苦情のないという一札をこつちへ取つて置いて、死骸は今夜火葬になつてしまえば、もう何もいざごさは残りませんからね。まあ、おお出来と云つていいでしょう。旦那にもよくそう云つてください。そうして、くどいようだが、当分は隠居所の方へ気のきいた者をやつて、娘のからだに間違いのないように気をつけるんですね」

「そう致しますと……」と、利兵衛はひたいに深い皺をよせた。「やっぱり何かお此さんにかかり合いがあるんでございましょうか」

「ありそうですね」と、半七はまじめに云つた。「ほかの事と違って、もう詮議のしよう

がありませんよ。娘をつかまえて吟味するのはよくないでしょう」

この事件は頗るあいまいで、たしかな急所をつかむのは困難であるが、半七の鑑定はまずこういうのであった。今まで口を利くことの出来なかつた徳次郎が、死にぎわにどうして話したか知らないが、かれがお此に殺されたというのはどうも事実であるらしい。芝居でする久松ひさまつのような美しい小僧は、二十六七になるまで一人寂しく暮している美しい娘と、主従以外の深い親しみをもっていたのではあるまいか。そうして、ほんの詰まらないいたずらが彼を恐ろしい死に導いたのではあるまいか。お此が針仕事をしている部屋が庭にむかっているのと、その庭へは店の方から木戸をあけて出入りが出来るという事実から想像すると、徳次郎はいつもその木戸口から隠居所へ忍び込んでいたらしい。隠居は八十を越して耳も眼もうとく、小女はいつこう役に立たないので、その秘密を誰もさとらなかつたのであろう。そのうちに恐るべき宵節句の日が来た。

その日、お此はいつものように六畳の部屋で針仕事をしていると、徳次郎も店の隙を見ていつものように忍んで来た。或いは使にゆく振りをして出て来たのかも知れない。かれは抜き足をして庭口から縁先へ忍び寄つて、おそらく咳払いぐらいの合図をしたであろうが、内には見す見すお此の坐っている気配がしていながら、わざと焦じらすように返事をし

なかつたので、彼は縁側へ這いあがって、閉め切つてある障子の紙を舌の先で嘗めて破つて、その穴から内を覗のぞこうとした。それは子供のよくするいたずらである。ませているようでもまだ十六の彼は、冗談半分にこうして障子の紙をやぶつた時に、内からそれを見ていたお此は、これも冗談半分に、自分の持つてゐる縫い針でその舌の先をちよいと突いた。勿論、軽く突いたのであるが、時のはずみで針のさきが案外に深く透とおつたので、内でも外でもおどろいた。しかし元来が秘密の事件であるから、徳次郎は思い切つて声を立てることも出来なかつた。

それでも針のさきで突いたのであるから、たとい一時の痛みを感じても、それが恐ろしい大事になろうとは、本人もお此も更に思い付かなかつた。なにか血止めの薬でも塗つて置いて、その場はそのままに済ませたのであるが、あいにくその針のさきには人の知らない一種の悪い毒が付いていたらしく、店へ歸つてから徳次郎の傷ついた舌のさきが俄かに強く痛み出して、遂に不運な美少年を死に誘つたのであらう。これは医者いしやの玄庵から教えられた予備知識に、半七自身の推断を加えた結論であつた。その苦しみのあいだに、彼はまったく口をきくことが出来ないのでもなかつたかも知れないが、そこに秘密がひそんでいるために、彼はわざと口を閉じていたのかも知れない。宿へ下がつて、いよいよ最期さいごの

日が近づいたと自覚した時、兄や嫂あねにいろいろ問い迫られて、彼はとうとう、その秘密を洩らしたのかも知れない。お此さんに殺されたという一句は、おそらく彼のいつわりなき告白であろう。

お此の部屋の障子を切り貼りさせたというのも、この事実を裏書きするものである。下から三、四段目の小間といえ、あたかも彼が縁側へ這いあがって首をもたげたあたりに相当する。殊にその翌日、猫のいたずらと云つて貼り換えさせた障子のやぶれは、徳次郎という白猫のいたずらの跡であろう。舌のさきで濡らして破つたのを、更に大きく引き裂いて猫の罪になすり付けるぐらいのことは、二十七八の女でなくても、思いつきそうな知恵である。こう煎じつめてみると、徳次郎の兄が山城屋へ捻ねじ込んで来るのも、間違つたことではないらしく思われる。勿論、一方は主人、一方は家来で、しかもそれが他愛もない冗談から起つたわざわいである以上、たとい表沙汰になつたところで、お此に重いお咎めの無いのは判っているが、それからひいて徳次郎との秘密も自然暴露することになるかも知れない。さなきだに種々の噂をたてられている娘が、いよいよ瑕きず物ものになつてしまわなければならない。山城屋の暖簾のれんにも疵が付かないとも云えない。また人情としても、徳次郎の遺族にそのくらいの贈り物をしてやつてもよい。それが半七の意見であつた。

利兵衛は息をつめて聴いていたが、やがて溜息まじりに云い出した。

「親分さん。恐れ入りました。そう仰しやられると、わたくしの方にも少し思いあたることがございます」

四

「なにか心当りがありますかえ」

半七は利兵衛の暗い顔をのぞきながら訊くと、今度は彼の語る番になった。

「実は去年の冬でございました。隠居が風邪かぜをひいて半月ばかり臥せていたことがございます。その看病に手が足りないのです、店の方から小僧を一人よこしてくれと云うことでしたから、あの音吉をやりましたところが、あれは横着でいけないというので一日で帰されまして、その代りに徳次郎をやりますと、今度は大層お此さんの氣に入りました、病人の起きるまで隠居所の方に詰め切りでございました。その後もなにか隠居所の方に用があると、いつでも徳次郎をよこせと云うことでしたが、前のことがありますので別に不思議にも思っていないませんでした。正月の藪入りの時にも、お此さんから別にいくらか小遣いこづかを

やつたようでした。それからこの二月の初め頃でございました。夜なかに庭口の雨戸を毎晩ゆすぶる者があるといつて、小女のお熊が怖がりますので、店の方でも心配してお此さんに訊いてみますと、それはお熊がなにか寝ぼけたので、そんなことはちつとも無いと堅く云い切りましたから、こちらでも安心してその儘にいたしてしまいましたが、今となつてそれやこれやを思いあわせますと、なるほどお前さんの御鑑定が間違いのないところでございましょう。まったく恐れ入りました。手前どもがそばに居りながら、商売にかまけて一向その辺のことに心づきませんで、まことに面目次第もないことでございます。そこで、親分さん。このことは主人にだけは内々で話して置く方がよろしゅうございましょうね」

「旦那にだけは打ち明けて置く方がいいでしょう。又あとのこともありますからね」

「大きに左様でございます。どうもいろいろありがとうございました」

ここの勘^{かんじょう}定^{じょう}は利兵衛が払うというのを無理にことわつて、半七は連れ立つて表へ出ると、雨あがりの春の宵はあたたかい靄^{もや}につつまれていた。ちつとばかりの酒の酔いに薄ら眠くなつて、もうお祭りでもないと思つたが、どうしても顔出しをしなければ義理の悪いところがあるので、遅くもこれからちよつと廻つて来ようと、半七はここで利兵衛と別

れた。

浅草の並木で一軒、広小路で一軒、ゆくさきざきで祭りの酒をしいられて、下戸げこの半七はいよいよ酔い潰れたので、広小路から駕籠を頼んで貰って、その晩の四ツ（午後十時）過ぎに神田の家へ帰った。帰ると、すぐに寢床へころげ込んで、あしたの朝まで正体も無しに寝てしまった。

眼のさめたのは五ツ頃（午前八時）で、あさ日はうららかに窓から覗いていた。まぶしい眼をこすりながら、枕もとの煙草盆を引きよせて一服すっていると、その寝込みを襲つて来たのは子分の善八であつた。

「親分、知っていますかえ。いや、この体ていたらくじゃあ、まだ知んなさるめえ。ゆうべ本所で人殺しがありました」

「本所はどこだ。吉良の屋敷じゃあるめえ」

「わるく洒落しゃれちやあいけねえ。相生町の二丁目の魚屋だ」

「相生町の魚屋……。徳蔵か」

「よく知っていなさるね」と、善八は眼を丸くした。「夢でも見なすったかえ」

「むむ。きのう浅草のお祭りへ行つて、よく揉んで来たので、三社様が夢枕に立つてお告

げがあつた。下手人^{げしゅにん}はまだ判らねえか。嬢^{かかあ}はどうしている」

「かかあは無事です。きのうの夕方、弟のとむれえを出して、家^{うち}じゅうががっかりして寝込んでいるところへはいって来て、あつまっている香奠を引つさらって行こうとした奴を、徳蔵が眼をさまして取っ捉^{つか}まえようとすると、そいつが店にある鰯^{あじ}切りで徳蔵の額^{ひたい}と胸とを突いて逃てしまつたんだそうです。嬢が泣き声をあげて近所の者を呼んだんですが、もう間にあわねえ。相手は逃げる、徳蔵は死ぬという始末で大騒ぎだから、ともかくも親分の耳に入れて置こうと思つてね」

「そうか。もう検視は済んだろうな。そこで、下手人の当りはあるのか」

「どうも判らねえようです」と、善八は云つた。「なにしろ嬢はとりみだして、気持ちがいのように泣いているばかりだから、何がなんだかちつとも判らねえようですよ」

「泣くのは上手だろうよ。女郎上がりだからな」と、半七はあざ笑つた。「ところで善八、おめえはこれから鳥越^{とりごえ}へ行つて、煙草屋の伝介はどうしているか、見て来てくれ」

「あいつを何か調べるんですかえ」

「ただその様子を何げなしに見て来りやあいなんだ。まご付いて気取^{けど}られるなよ」

「ようがす。すぐに行つて来ます」

「しつかり頼むぜ」

善八を出してやって、半七はすぐに本所へ行つた。きのうは弟の葬式とむらいを出して、きょうはまた兄貴の死骸が横たわっているのであるから、近所の人たちは呆れた顔あきをして騒いでいた。表にも大勢の人が立つて店をのぞいていた。その混雑をかき分けて店へはいると、女房のお留は町内の自身番へ呼び出されたまま、まだ帰されて来なかった。きのうの葬式で近所の人とも顔なじみになつていたので、半七はそこらにいる人達から徳蔵の死について何か手がかりを聞き出そうとしたが、どの人もただ呆氣あつけにとられてゐるばかりで、何かなにやらよく判らなかつた。

一番先にこの騒動を聞きつけたのは、隣りの小さい足袋屋の亭主であつた。魚屋の家でなにかどたばたするのを不思議に思つて、寝衣ねまきのままで表へ飛び出して、となりの店の戸をひらくと、内では「泥坊、泥坊」という女房の叫び声がきこえたので、亭主はおどろいて、これも表で「泥坊、どろぼう」と呶鳴なめいつた。この騒ぎで近所の者もおいおい駈け付けたが、賊は徳蔵を殺して裏口から逃げてしまつたのである。徳蔵は他人ひとから恨みをうけるような男でないから、これはおそらく香奠めあての物取りで、徳蔵が手向いをした為にこんな大事になつたのであらうと、足袋屋の亭主は云つた。ほかの人たちの意見も大抵それ

に一致していた。

半七は店口に腰をかけてしばらく待つていたが、お留はなかなか帰って来なかった。この間に半七は油断なくそこらを見まわすと、きのうもきょうも商売を休んでいるので、店の流しは乾いていた。盤台も片隅に積んであった。その盤台のかげの方に大きいさやえ蝾螺や赤貝の殻が幾つもあるのが、彼の眼についた。なかなか大きい貝だと思いながら、彼は立ち寄つてその一つ二つを手を把つてみると、貝はいずれも殻ばかりで、その中でも大きい蝾螺はうつ伏せになっていた。その蝾螺の尻をつかんで引つ立てようとする、それはひどく重かった。横にころがして貝のなかを覗くと、奥にはなにか紙のようなものが押し込んであるらしいので、すぐに抽ひき出してあらためると、それはたしかに百両包みであつた。つつみ紙には血のついた指のあとが残つていた。

あたりの人たちに覺さとられないように、半七はその百両包みをふところに忍ばせた。まだほかに何か新しい発見はないかと見まわしているところへ、表から彼のか伝介がふらりとはいつて来た。商売にまわる途中と見えて、きょうは煙草の荷を背負つていた。かれは半七の顔を見て、さらに内の様子を見て、すこし躊躇ちゅうちうしているらしかつた。

「お早うございます。きのうは御苦労さまでございます」と、彼は半七に挨拶した。「き

ようもなんだか取り込んでいるようですね」

「むむ。大取り込みだ。徳蔵はゆうべ殺された」

「へええ」と、伝介は口をあいたままで突つ立っていた。

「ところで、おめえに少し訊きてえことがある。ちよいと裏へまわってくれ」

おとなしく付いて来る伝介を導いて、半七は横手の露地から裏手の井戸端へまわった。

「もうここまでお話をすれば、大抵お判りでしょう」と、半七老人は云った。「伝介はお留が吉原にいた頃からの馴染で、年があけても自分の方へ引き取るほどの力もないので、相談ずくで徳蔵の家へ転げ込ませて、自分もそこへ出這入りしていたんですが、よほど上手に逢い曳きをやっていたとみえて、亭主は勿論、近所の者も気がつかなかったんです。ところで、不思議なことには、そのお留という女は勤めあがりで、おまけにそんな不埒なところで、働いている奴にも似あわず、おそろしくかいがいしい女で、働くにはよく働くんです。世間体をごまかす為ばかりでなく、まったく服装にも振りに構わずに働いて、一生懸命に金をためる。色男の伝介には何一つ貢いでやったことは無かったそうです。つまり吝嗇な人でしょね」

「そうすると、山城屋へ因縁^{いんねん}を付けさせたのも、みんな女房の指尺^{さしがね}なんですね」と、私は云った。

「無論そうです。亭主をけしかけて三百両まき上げさせようとしたのを、徳藏が百両で折り合つて来たもんですから、ひどく口惜しがって毒づいたんですが、もう仕方がありません。まあ泣き寝入りで、いよいよ葬式^{とむらい}を出すことになってしまったんです」

「じゃあ、亭主を殺して、その百両を持って伝介と夫婦になるつもりだったんですね」

「と、まあ誰でも思いましたよ」と、老人はほほえんだ。「わたくしも最初はそう思っていたんですが、伝介をしめ上げてとうとう白状させると、それが少し違っていているんです。伝介はたしかにお留と関係していましたが、今もいう通り、何一つ貢いで貰うどころか、あべこべに何とか彼^かとか名をつけて、幾らかずつお留に絞り取られていたんだそうです。そんなわけですから、今度の亭主殺しもお留の一存で、伝介はなんにも係り合いのないことがわかりました」

「なるほど、それは少し案外でしたね」

「案外でしたよ。それならお留がなぜ亭主を殺したかというと、山城屋から受け取った百両の金が欲しかったからです。亭主のものは女房の物で、どっちがどうでもよさそうなも

のですが、そこがお留の変ったところで、どうしてもその金を自分の物にしたかったんです。それでも初めからさすがに亭主を殺す料簡はなく、亭主の寝息をうかがってそつと盗み出して、台所の床下へかくして置いて、よそから泥坊がいったように誤魔化すつもりだったのを、徳蔵に見つけられてしまったんです。それでも女房がすぐにあやまれば、又なんとか無事に納まったんでしょうが、お留は一旦自分の手につかんだ金をどうしても放したくないので、いきなり店にある鰯切り庖丁を持ち出して、半分は夢中で亭主を二力所も斬ってしまった。いや、実におそろしい奴で、こんな女に出逢ってはたまりません」

「それでもお留は素直すなおに白状したんですね」

「自身番から帰って来たところをつかまえて詮議すると、初めは勿論しらを切っていました。たが、蝶螺の殻と金包みとをつきつけられて、一も二もなく恐れ入りました。よそからはいった賊ならば、その金を持って逃げる筈。わざわざ貝殻なんぞへ押し込んで行くわけがありません。おまけに包み紙に残っている指のあとが、お留の指とぴたり合っているんですから、動きが取れません。亭主を殺したどたばた騒ぎで、隣りの足袋屋が起きて来たので、お留は手に持っているその金の隠し場に困って、店の貝殻へあわてて押し込んだのが運の尽きでした。当人の白状によると、徳蔵を殺したあとで一方の伝介と夫婦になる気

でもなく、かねて貯えてある六、七両の金とその百両とを持って、故郷の名古屋へ帰って金貸しでもするつもりだったそうです。そうになると、色男の伝介も置き去りを食うわけで、命を取られないのが仕合わせだったかも知れませんよ。お留は無論重罪ですから、引き廻しの上、千住で磔^{はりつけ}刑にかけられました」

これで魚屋の方の問題は解決したが、まだ私の気にかかっているのは山城屋の娘の一件であつた。一方にこうした重罪犯を出した以上、その百両の金の出所も当然吟味されなければなるまい。ひいては山城屋の秘密も暴露されなければなるまい。それについて半七老人の説明を求めると、老人はしずかに答えた。

「山城屋は気の毒でした。折角無事に済ませたものを、この騒ぎのために何もかもばれてしまいました。お此はそれについて勿論吟味をうけることになりましたが、小僧の一件はすべてわたくしの鑑定通りで、下手人には取られずにまず事済みになりましたが、もうこうなつたらいいよ縁遠くなつて、婿も嫁もあつたもんじゃありません。山城屋でもあきらめて、番頭の利兵衛に因果をふくめて、無理に婿になつて貰うことにしました。利兵衛もいろいろ断わつたのですが、主人の方からわたくしの方へ頼んで来まして、利兵衛を或るところへ呼んで、主人は手を下げないばかりに頼み、わたくしもそばから口を添えて、

どうにかまあ納^{なつとく}得させたんです。娘も案外素直に承知して、とどこおりなく祝^{しゅうげん}言の式もすませ、夫婦仲も至極むつまじいので、まあよかったと主人も安心し、わたくしも蔭ながら喜んでいましたが、そのあくる年に娘は死にました」

「病死ですか」と、私はすぐに訊き返した。

「いいえ、なんでも六月頃でしたらうか、ある晩そつと家^{うち}をぬけ出して不忍の池へ身を投げたんです。死骸が見付からないなんていうのは嘘で、蓮^{はす}のあいだに浮きあがった死骸はたしかに山城屋で引き取りました。いつそ死ぬならば、媚を取らないうちに死にそうなものでしたが、どういうわけか判りません。弁天様の申し子はとうとう弁天様に取り返されたのだと世間では専ら噂していました。そうして、巳^みの日の晩には池のうえで娘の姿を見たものがあるとか云っていました。嘘かほんとうか知りません」

青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」 光文社文庫、光文社

1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

入力：tat_suki

校正：菅野朋子

1999年7月14日公開

2012年6月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

半七捕物帳

弁天娘

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>